

## 木工旋盤を使用した木育講座

一樹と木をつなぐー

森と木のクリエイター科 木工専攻 白瀧 周

### 1. 研究背景

私は本校に入学する前に保育士をしてきた。子どもたちは一つの発見から次々と興味生まれ、自身の世界を広げていた。そこで私は子どもたちが、生きている樹と暮らしの中の木製品が同じものだと気付くことで森やものづくりのことに興味を広げられるのではないかと考えた。

しかし木育の講座には半完成品のキットを用いて、樹と木製品が同一のものであると気付かせるものが多い。このプログラムの構成は、つながりを言葉と代替品の資料で説明するため、直感的に分かりにくい側面がある。生きた木＝丸太から木製品になる瞬間を見てもらう講座が実現できれば、より、樹と木製品のつながりを実感できるのではないかと考えた。

### 2. 目的

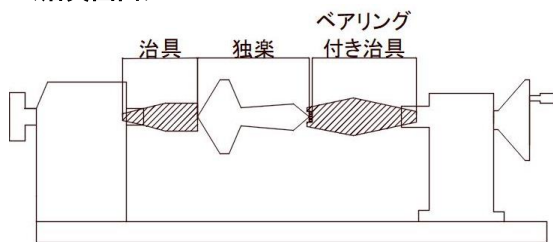
生きている樹と木製品のつながりに気付く、木育プログラムの開発

### 3. 方法

木工旋盤を使った独楽作り講座を実践して、樹と木製品のつながりが実感できるか検証する。木工旋盤は、丸太の材料(生きた樹)を取り付け、回転させながら切削・加工することで、皿や独楽といった回転体の製品を1台の機械で作ることができる。参加者は木工旋盤で丸太から独楽を作る過程を見た後に、絵付けを体験して独楽を完成させる。

### 4. 絵付け治具の開発

#### <治具図面>



講座を企画するにあたり、絵付けの作業性と効率を考えて治具を作成した。この治具を使うことで、事前に製作した独楽も木工旋盤に取り付けての絵付けが可能になった。

### 5. 実践

#### 実践1 課題の抽出

本番の講座を行う前に、morinos 広場の一角を借りてプレ実践を行った。自由遊びをしている年長児の前で独楽作りを行い、独楽の絵付けも体験してもらった。



安全対策の髪留めや、作業性を考慮した高さの台を使うことで、独楽づくりは安全、円滑に行えた。一方で絵付けの待ち時間が発生した。また、樹と木製品のつながりの説明が不十分だったため、子ども達は樹と木製品のつながりを実感できていなかった(→独楽が単なるお土産になってしまった。)

#### 実践2 保育園での独楽作り講座

プレ実践での課題をふまえ、木工旋盤を2台に増やし、説明資料(立ち木の写真、実物の枝葉や木の実)を準備した。1)材料(エゴノキ)の説明 2)独楽作り実演 3)絵付け体験 4)独楽遊び 5)まとめの流れで講座を行った。

#### 実践2-1 牧谷保育園

美濃市の牧谷保育園で年長児6名を対象とした独楽作り講座を行った。

<保育士による評価と課題>

◎木の説明に写真や実験があり、子ども達にもわかりやすかった。好きな色に絵付けができて、自分の作った独楽に満足そうにしていた。



△独楽づくりの際に削り屑に意識が向かってしまった。

△絵付けしたことを客観的に振りかえる機会があった方がいい。

#### 実践2-2 下牧こども園

牧谷保育園での課題を踏まえ、改善した内容で

美濃市の下牧こども園で年長児 8 名を対象とした講座を行った。独楽作りの際に子どもの気が散らないよう、言葉がけを減らした。また、絵付けの際にお互いの作業を見てもらい、客観視する時間を作った。



独楽作りでは、集中してみてもうために五分間は削られていく個所の説明以外の話は

しなかった。集中が途切れかけた時に樹の匂いや感触を確かめてもらい最後まで集中が続いた。絵付け体験では、お互いの作業を見ながら待つことで、満足のいく絵付けができたようであった。

<保育士による評価>

○樹が独楽に変わっていく瞬間が見られて子どもにとっていい体験になったと思う。

○世界で一つだけの独楽が出来て、子どもたちはうれしかったようだ。

◎勝手におもちゃができるのではなく、木材から誰かがおもちゃを作ってくれていることが伝わったと思う。

<その他の課題>

・色鉛筆を使った絵付けは、線が細く薄いため、時間がかかり待ち時間が生じてしまう。

### 実践 3 ぎふ木遊館 親子の独楽づくり講座

午前子ども 6 名 保護者 5 名で実施。

午後子ども 5 名 保護者 4 名で実施。

ワークショップの参加対象とフィールドを変えても、樹と木製品のつながりを感じてもらえるか検証するため、親子を対象とした実践をぎふ木遊館で行った。



プログラムの流れは保育園の講座同様だが、参加する子どもは年中～小学 4 年生まで広がった。保護者にも樹と木製品

のつながりを感じてもらうために、樹の説明に和傘を含めた製品の紹介を増やした。保育園で時間のかかっていた絵付けは水性ペンに変更したことで時間が削減された。

<保護者からの評価>

- ・丸太から独楽ができる過程が見られて感動した。
- ・木に触れられる経験が貴重であった。
- ・木についてさらに親しみが増した。
- ・子どもだけでなく、大人も独楽が作られる工程を見られてよかった。

## 6. ワークショップのコスト調査

大阪で木工旋盤教室を運営するナカジマウッドターニングスタジオ代表の中島信太郎氏にヒアリングを行い、講座のコスト計算を行った。

また岐阜県には木育活動に対する助成金があるので、助成金を活用した試算も検討した。

	通常	助成あり
人件費(1人分)	30,000	-11,200
交通費(km+高速代)	4,200+	全額補助
	13,860	
機材リース(旋盤4台)	10,000	全額補助
材料費(独楽×人数)	16,800	全額補助
合計	74,860	18,800

※参加人数 24 名、アカデミーで開催した場合

助成金(清流の国ぎふ地域活動促進事業)

## 7. まとめ

牧谷保育園での講座の最後に「樹から出来た物は何がある？」と質問した時、子ども達から即座に『家』『椅子』『お皿』といった答えが返ってきた。子ども達の回答から、樹と木製品のつながりを理解してもらう事ができたと実感した。

また下牧こども園での講座では「勝手におもちゃができるのではなく、木材から誰かが作っていることが伝わったと思う」とアンケートに記述されていた。樹と木のつながりから、作り手の存在に意識が広がっていることがわかる。子どもは興味をきっかけに自身の世界を広げることができる。この講座は子どもたちの世界を広げる一助になったのではないだろうか。

実践を繰り返し行い、ブラッシュアップをしたことにより、保育園児から大人までを対象とした木工旋盤を使用した木育講座の形が出来上がった。子ども達は、木の匂いや削りくずの手触りなどに興味を持つ傾向があり、大人は独楽を削り出す、職人的な加工工程に関心を持って見入っていた。

親子対象とした講座では子どもだけでなく、保護者も楽しみ、樹と木製品のつながりを体験できたとアンケートに記入されていた。子どもだけでなく、大人も樹から木製品になる瞬間を見る機会は滅多にない。そのため保育園だけでなく、親子対象の講座も需要があることが分かった。

## 8. 今後の活動

卒業後はヒアリング調査を行ったナカジマウッドターニングスタジオに就職する。そこで木工旋盤の新たな使い道として、親子や保育園などの施設を対象に木工旋盤×木育の可能性を追求していきたいと思っている。